

法実務教育のあり方——龍岡・戸松両教授の「対談」を読んでの雑感

荒木新五*

1 はじめに

私は、2004年4月の学習院大学法科大学院発足時より、実務家教員として、民法(ないし民法周辺)の授業を担当している。

実は、同発足の1年前から、同大学法学部で民法の授業を担当していた(2006年度前期で終了)。また、1996年から他大学の大学院法学研究科で11年間、民事執行法及び民事保全法の授業を担当していた。

ということで、(教員として適任かどうかはさておき、自分としては)教員としての仕事には特に違和感をもなく、自然に日常生活のサイクルに組み込まれているといえる。

とはいえ、私の「本業」は、まぎれもなく、弁護士である(これまで、大学の教員であることを示す名刺を作ったことはない)。「本業」ではないからといって、教員としての仕事をおろそかにしているつもりはないが、毎日、朝から晩まで、大学のキャンパスにいて、しょっちゅう学生諸君と顔を合わ

* 2004年より学習院大学法科大学院教授。現在弁護士。民法・借地借家法担当。

せたり、日常的に悩みごとを聴いてあげたりするような時間的余裕がないのも事実である。ただ、「現役」の弁護士として、実務を日々こなしているからこそ感じることも、言えること、できることなども多々あるだろう。

そんなこんなを思いつくまま述べることにしたい（「法実務教育のあり方」などと、大層なタイトルをつけてしまったが、内容は、文字通りの「雑感」にすぎないことを、あらかじめおことわりしておきたい）。

2 法科大学院教育について

◆法科大学院の役割

正直に言えば、私の頭の中は、モヤモヤしている。

実務家を教員として採用する以上、実務家が実務を教えることが当然に要求されているのであろうが、実務は、たいていは、実務をやらないと修得できないのが現実である。ハンドルの握り方や回し方を本で勉強したり、教室で教わったからといって、自動車の運転ができるわけではない。しかし、実際にハンドルを握らせる前に、赤信号では止まらなければならないことなど、交通ルールを教えることは必要だろう。そのあたりの、実務、或は実務に必要な知識や技術等をどこまで修得させなければならないのだろうか。

「実務」の直前教育機関である司法研修所との役割分担も—それについて書かれたものは多数あるようだが—今ひとつ、わからないところである。

モヤモヤ感を払拭できないままではあるが、私は、むしろ、随時、参考となるような「実務」を語りつつ、極力、基礎理論を学ばせることに力を入れている（といっても、浅学非才な私が深遠な理論を語ることはできない）。

◆授業の進め方

どのような授業のやり方が適切かは、その科目と学生のレベルによって異なるだろう。大ざっぱに言えば、基本科目を応用した発展的な科目、未だ学生が十分には勉強していないと思われるような科目は、大教室での、大人数を相手とする講義形式でもかまわないと思われる（私が担当している「借地借家法」では、インメモリをさせないように、時々、学生に質問をして答えさせたりしているが、講義方式を中心にしている）。

しかし、民法、刑法といった基礎的な科目では、少人数で、対話方式（ソクラテズメソッド）のほうが、効果があるように思える（私が担当している「民法入門5」や「担保法」では、私が作った、比較的簡単な事例問題について、指名した学生に回答させ、他の者にも質問するなどして、議論を進めるという方法をとっている）。

◆学生の姿勢

私が学生に常日ごろ強調していることは、「教室は、私が何かを教える場ではない。君達が考える訓練をする場である」ということである。

教室で、基本書なり概説書なり、教科書めいた書籍に書いてあるようなこと（そのようなものは、すでに学生諸君がひととおり読んで、教室に来ていることを前提として、私は授業に臨んでいる）をわざわざ再述したりはしないし、私自身が「正しい」と考える自説を述べることはあるとしても、それが唯一「正しい」考えだというわけではないこと、もちろんである（何をもって「正しい」とするかは、学生自身が考えることである。「正しい答えは何ですか」といわれても、私は私の考えを述べるだけである）。

そこが、幼稚園や小学校の授業とは違うところである。

また、学生の中には、判例の見解は、つねに絶対的に「正しい」と信じている者がいるようである（期末試験で事例問題を出題すると、「判例は…である。従って、…である」というような答案が少なからず見受けられる）。実務上、判例が重要な役割を営んでいることは否定しないが、「正しい」かどうかは別問題である（授業では、私自身が必ずしも判例の見解に反対しているというわけでもない場合にも、学生を“挑発”し、“刺激”するために、あえて判例に反対する見解を強調することも、しばしばである）。

◆期末試験

期末試験は、単なる成績評価のためのものではなく、授業の一環であると考えている。

先般の私の授業に関するアンケート調査における学生の回答の中に、「授業であんなに熱心に法定地上権について説明をしたのに、法定地上権に関する問題ではなく、授業では十分に時間をとらなかった譲渡担保に関する問題を出すのは卑怯だ」というのがあった。

アホか、おマエは！ 授業で十分に説明することができなかったからこそ、特に勉強してもらおうという“親心”で出題したんだっ！「卑怯」とはナンダッ！（…と腹が立った）。

ついでに（何かで読んだものだが）法律関係ではないものの、ある大学の先生は、期末試験に際して、学生が「ヤマをかける」ことを勧めておられるのだそうだ。授業で扱う科目ごとに、たいていは10個前後の重要な論点（ヤマ）があって、それぞれの論点について「試験に出るかもしれない」と思って勉強することは、学習効果からみても有益な方法だと書いておられた。期末試験に限らず、司法試験でも同じことがいえるだろう（「担保法」では、もちろん、譲渡担保も「ヤマ」をかけてしかるべき、重要な論点のひとつである）。

3 司法試験対策

◆「予備校化」への懸念

学生の中には、法科大学院を司法試験のための予備校であるかの如く誤解

している者や予備校としての役割を期待している者もいるようであるが、法科大学院は予備校ではないし、「予備校化」することは、法科大学院制度の理念に明らかに反する。

もちろん、我が学習院大学の法科大学院卒業生が一人でも多く司法試験に合格することを切望してやまないが、それは学生諸君の勉強の結果であって、それを目的として授業を行っているわけではないし、試験に向けての、特別の「対策」を講じる必要はないだろう。

◆論文ベタについて

「対談」において、学生の「論文ベタ」が指摘されているが、私も全く同感である（試験のつど、講評の中で、答案の文章について、こっぴどく酷評している。もちろん、自分のことはタナにあげて）。司法試験対策としてではなく、法曹にふさわしい論文能力を学生に修得させることが求められていることはいうまでもない。

しかし、どのように論文能力を修得させるかは難しい問題である。

「対談」の中で戸松教授が「日記をつけること」を勧めておられるが、どうだろうか。

実は、私は、（全く、自慢にはならないが）12歳の時から半世紀近く、一日も欠かさず日記をつけている（ぶ厚い大学ノートがすでに110冊を超えている。うっかりすると、ギネスブックに載せられるかも…）が、「文章力」が培われたわけではないことは、ご覧のとおりである（日記をつけて人格が向上したというわけでもない。最近、とみに「人間が丸くなった」のは、日記のせいではなく、トシのせいである）。

最近の学生の文章がヘタクソなのは、本を読まなくなったせいだ、という説もある。私自身は、（これも全く自慢にはならないが）うんと若いころから小説（特に、歴史小説や海外のミステリー）を読むのが大好きで、今も（純粋に個人的な娯楽として）まあまあよく読んでいるほうだと思うが、やはり、文章力が培われたわけではないことはご覧のとおりである（やはり、本を読んで、人格が向上したというわけでもない）。

話が飛んでしまったが、あえて、ひとつだけ、論文の書き方を、手っとり早く学ぶ方法を提案したい。それは、最高裁の判決書の「理由」を、いくつか丸写しをしてみることである（ちなみに、高名な小説家が文章修業のため、自分の崇拜する先輩小説家の小説を丸写ししたという話を何度も読んだことがある）。判決文が「悪文」の典型であるかのような批判もよく目にするところであるが、最高裁の判決文は、（その論旨に賛成するか否かは別として）たいいていの場合、優れて論理的で、よく練れた文章だと思う。大論文を書く場合はともかく、司法試験における答案程度の論文では、いい「お手本」に

なるのではないだろうか（ただし、無責任なハナシだが、私自身は実践したことがない。だから、文章力は上達しないままである）。

4 あるべき実務教育

◆「実務」教育の内容

前述のとおり、実務は、だいたいにおいて実務をやりながら修得するものであり、教室での授業でどの程度のことができるかは、大いに疑問である。

法科大学院では、法律が、或いは法理論が、実際の紛争解決にどのように結びついているか、どのように役立っているのか、ということを意識させながら、（あまり「実務」、「実務」と言わないで）じっくりと基礎理論（それが「空理空論」ではないこと）を学ばせるべきではないか、と考えている。基礎理論が身についていれば、実務も（法科大学院で、さほど「実務」を学ばなくても）十分にこなせるはずだ（…とエラそうなことを言っているが、私自身は、基礎理論が十分身についていないので、実務でも、いつもオタオタしている）。

◆むすび

ダラダラと、論文のお手本には絶対にならない駄文をつらねてきたが、最後に、法曹を志す諸君のために、（あまり正確に記憶しているわけではないが）先日テレビで見た「M-1」で漫才グランプリに輝いたパンクブーブーのやりとりの一部を紹介して、締めくくりたい。

弟子入り希望の男「私は、先生の作品を見て、ぜひ、先生に弟子入りしたいと思いました。」

陶芸家「ほう。私の作品がそんなに良かったかね。」

弟子入り希望の男「いいえ。これくらいなら私にもできそうだと思います。」